

住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり
—浜村の活性化に向けた川口市視察—

佐藤 匡・梅谷 康平・河合 真希・岸本 星乃・西田 歩未・宮脇 ちひろ・與倉 千花

The Sustainable Community-based Planning to Balance Life
of the Inhabitants and Tourism
—Inspection of Kawaguchi for Accelerate Community of Hamamura—

SATOU Masashi, UMETANI Kohei, KAWAI Maki, KISHIMOTO Hoshino,
NISIDA Ayumi, MIYAWAKI Chihiro, YOKURA Chika

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第19巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 19 / No. 1

令和4年8月25日発行 August 25, 2022

住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり

－ 浜村の活性化に向けた川口市視察 －

佐藤 匡*

梅谷 康平** 河合 真希** 岸本 星乃**
西田 歩未** 宮脇 ちひろ** 與倉 千花**

The Sustainable Community-based Planning to Balance Life of the Inhabitants and Tourism

－ Inspection of Kawaguchi for Accelerate Community of Hamamura －

SATOU Masashi*

UMETANI Kohei** KAWAI Maki** KISHIMOTO Hoshino**
NISIDA Ayumi** MIYAWAKI Chihiro** YOKURA Chika**

キーワード：地域活性化，浜村地区，川口市，観光，生活拠点

Key Words: Accelerate the Community, the Hamamura District, Kawaguchi City, Tourism, a Living Base

はじめに

「公務員になりたい！」との希望を持って地域学部に入學してくる学生は多い。しかし、実際に公務員が日々どのような業務に携わっているのかについて理解して希望している学生は非常に少ないのが現実である。そのため、「公務員になってどんな仕事をしたい？」という質問に対して明確に回答できる学生はほとんどいない。ただ漠然と抽象的に「公務員になりたい！」というだけで、どのような仕事内容なのか明確かつ具体的にわかっていないため、公務員なら何でも良いということになっている現状があるように思える。中には親がそう望んでいるからとか、友人が目指しているからといったまったく主体性のない話も散見される。このことは就職活動において明確な将来像を描けていないことによるマイナス面だけではなく、就職後に「こんなはずではなかった」ということとなる危険性すら有していることとなる。とはいえ、公務員に限らず私企業に就職する学生についてもどのような仕事かよくわからずに就職することも多いのであって、また、職務内容については実際に就職した後研修等で学べばより正確であるし、然るべき担当から指導を受ける方が間違いない、所謂「餅は餅屋」的な発想から、これまでは特にこのような職業について、

ゼミ内におけるある種のキャリア教育には力を入れてこなかった。実際、そのようにしていても研究室に所属する学生たちは希望の就職先に就職していったし、現実にその就職先で活躍しているようでもある。しかし、学生たちの進路希望を聴くたび、もう少し明確な将来像を描けないものか、自身に最も適した就職先を学生の間に見つけて欲しいという想いは拭い去ることはできなかった。

私（佐藤）は、地方公共団体における様々な委員を20件近く拝命している関係上、その委員会に関わる事務局の職員の方々や委員の方々へ接する機会が非常に多い。事務局の担当者は当然公務員の方々であるが、委員の方々には私企業の職員を含め様々な経歴を有している人がいる。そこで、そのような方々に公務員に限らず私企業も視野に入れて学生たちの将来像についての話をさせていただいたところ、非常に興味を持っていただき、是非学生たちに職務内容の話をして欲しいというとてもありがたい申出をいただくことが多くなってきた。そこで、佐藤研究室においては、これまで様々な公務員の方々やいろいろな職種の方々に実際に大学へ足を運んでいただき、その職務内容や就職後の研修内容、どのようなキャリアアップが

* 鳥取大学地域学部地域学科

** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース佐藤研究室3年

図れるかといった講演をさせていただいている。公務員に限ると、これまでに裁判所事務官・裁判所書記官・家庭裁判所調査官・検察事務官・公正取引委員会の職員・労働局の職員・県の職員・市の職員・市議会議員といった方々にご講演いただいております。その内容は新聞等にも報道されている¹ところである。学生たちからしてみれば市役所の窓口業務しか（役所で最も重要なのが住民との接点である窓口業務ではあるが）公務員像が描けなかったところ様々な職種があり、自分の知らないところで自分とも関係しているということを知って、毎回満足しているようである。そのおかげで近年、自身の進路を明確にイメージし、希望の職業に就くことができる学生が増えるようになってきている。忙しい中、大学まで足を運んでいただき、貴重なお話を学生たちにさせていただいているみなさまには感謝の言葉しかない。

先述の通り、様々な公務員の方や職種の方々にはお忙しいところわざわざ大学に足を運んでいただきご講演いただいている。その流れで、裁判傍聴や検察庁の庁舎見学、市議会議場での発表といった学生先方に出向く機会もいただいているところである。といっても、まずは学内で話を伺うというのが中心であって、その上で招待されるというのが通常であった。そのため学外での活動は極めて少なかったといえるであろう。

そのような中、近年、鳥取市から町内会の加入促進についての調査依頼²や気高総合支所からの浜村地区地域活性化プロジェクトへの参加要請³等をいただき、学外での活動をする機会が増えてきているところである。特に後者、2020（令和2）年度から「浜村地区活性化委員会⁴（以下「活性化委員会」）」に参加し、鳥取市気高町浜村（以下「浜村地区」）の活性化を学生の立場からサポートしている（この活動を「浜村地区活性化学生プロジェクト」という）ことは学外での活動の最たるものである。2021（令和3）年度には、月1回の委員会への参加に加え、現地視察・訪問アンケート調査・住民企画のイベントのボランティアといった活動を行ってきた。また、2022（令和4）年度は、月1回の委員会がなくなり、各班の報告会⁵となるため、それへの参加や気高町総合支所（以下「気高支所」）との定期的な情報交換及び依頼に応えていくという方針で活動を行うこととしている。さらに、他市の地域活性化事例の調査も積極的に行っていく予定としている。本稿は、その一環として行った埼玉県川口市視察について考察するものである。

なぜ遠く埼玉県のそれも川口市なのか。これには3つの大きな理由がある。

まず、埼玉県川口市は私（佐藤）に非常になじみ深い土地であるということである。私自身周辺自治体に居住していた経験があり、また別の周辺自治体で働いていたこともあり、現在はさらに別の周辺自治体の行政不服審査会及び情報公開・個人情報審査会の委員をしている。つまり、埼玉県川口市には私自身土地勘があるのである。実際に今でも食料品等買い物に訪れることも多く、まさに私にとっての生活圏内であると言ってもよい地域である。

次に、上記の理由からなのか、YouTube のおすすめ動画に、2022年1月頃から『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』という映画があがるようになってきた。最初は何か公開される映画の広告か何かかなのかなとあまり気にも留めていなかったのだが、なんとなく面白そうといった理由で、ただなんとなくこの映画を視聴してみた。わずか1時間弱の映画であったが、自身が訪れた川口の街の名所がふんだんに盛り込まれつつも、映画の話の筋を崩すことなく、さりげなく街のPRをしていることから、とても親近感が湧きつつ最後まで楽しめた。本映画のさらに詳細な内容については、後に学生たちに紹介してもらうこととするが、地域学部の学生たちが観たら大いに参考となるだろうと思える内容であると素直に感じたのであった。そこで、私の研究室の学生や研究室に入室予定の学生たちに紹介し、実際に各自 YouTube にて観てもらい、その後ゼミ内で感想を聞いたところ、学生全員がこの映画の舞台である埼玉県川口市に実際に行きたいということだった。そこでそれならば自分たちで川口市に連絡を取り、自分たちで計画を立てたら訪問しても良いという条件を出したところ、学生たちが先方に連絡をとり、先方でも歓迎していただけたということだったので実際に訪問することとなった。

最後に、埼玉県川口市は中核市である。中核市に移行したのは2018（平成30）年4月である。これは気高町浜村を擁する鳥取市が中核市に移行したのとまったく同時期である。そのため、このような同時期中核市に移行した市同士を比較するのも面白いのではないかと感じたということも、今回の考察対象とした理由である。

以上のことから、埼玉県川口市に実際に訪問させていただき、そこで観たり聴いたりした経験を今取り組んでいるプロジェクトに活かすということが今回の視察の最大のミッションであり、本稿で考察する最大の目的である。

ここからは埼玉県川口市において貴重な経験をさせていただいた佐藤研究室の3年生に筆を譲りたいと思う。

第1章 調査の前提

本章では、私たち佐藤研究室の学生が埼玉県川口市を視察対象地として選択した理由について述べたいと思う。特に、第1節では浜村地区の現状、前提となる浜村地区活性化プロジェクトの概要と契機及び目的に触れながら述べ、第2節で川口市着眼の経緯を述べたいと思う。

1 浜村地区について

埼玉県川口市について述べる前に、まず、鳥取県鳥取市気高町浜村地区の特徴と現状について述べたいと思う。気高町浜村地区は、気高町の人口の約半数を抱える地区であり、経済においてもこの地域を支える重要な役割を担っている⁶。地区内には、JR西日本浜村駅及び宝木駅が存在し、鳥取や倉吉、米子といった中心市街地まで鉄道1本で行くことが可能である。浜村駅付近には、かつて栄えていた温泉街だったことを思わせる通り⁷があり、そこに郵便局や観光案内所・旅館・地元の飲食店・移住者によるコミュニティカフェや焼き菓子店⁸等が集積している。地区内には他にもスーパーマーケットや「ヤサホーパーク」⁹という大きな公園・地域の図書館が存在し、生活の上で必要なものがほとんどすべて揃っているといえる。このように、居住地域として住みやすいまちであると思える浜村地区であるが、かつて温泉街として栄えたにも拘わらず、観光面においては「住民生活との両立ができていない」という課題がある。また、観光案内所の敷居が高くて入り辛い、所有者不在の廃屋となった旅館跡が景観を阻害している等といった課題も山積している。

次に、浜村地区活性化プロジェクトの概要について、その契機を交えつつ述べたいと思う。本プロジェクトは、佐藤研究室所属の学生主体で浜村地区の住民及び鳥取市気高総合支所と連携して、気高町浜村地区の活性化のための活動及び地域活性化についての調査・研究を行うものである。活動の端緒については、2020（令和2）年に、当時の気高総合支所の副支所長から、かねてから親しくしている指導教員（佐藤）へ観光面での地域活性化についての相談が持ち掛けられたことに発する。その内容が当時の所属学生（令和3年度卒業生及び現4年生）の関心事項と合致していたことから、指導教員の提案で、地域活動団体及び有識者等から構成される活性化委員会にこれらの学生が参加することとなった。また、実際に指導教員が本委員会のアドバイザーとして加わっており、学生3名も学生アドバイザーとして加わった。その委員会において「浜村地区まちづくりランドデザイン¹⁰」が策定されたことから、浜村地区の将来計画や住民・行政・地域団

体が今後取り組むべき課題・テーマが可視化され、課題実現のためにより具体的な取り組みが開始されることとなった。2021（令和3）年度には、このランドデザインを基礎に、2022（令和4）年から2024（令和6）年の3年間で実施する第1次計画が策定された。この第1次計画は「住民がつながるまち」「空き家の活用と美しい街並みのまち、気軽に商いができるまち」「みんなが気軽に温泉に入れるまち」の3項目からなり、現在は委員に就任している住民の方々が中心となって活動を行っている。佐藤研究室所属の学生たちは、アドバイザーとして活性化委員会への参加、ランドデザイン認知度等に関する訪問アンケート調査の実施、住民企画の温泉イベント¹¹へのボランティア参加等において、気高町浜村地区で幅広く活動している。現在は先述の通り、住民主導で活動が実施されており、従来は月1回行われていた委員会の開催が今年度からはないことから、地域活性化について他地域との比較を含めた調査・研究の方に力を注いでいるところである。また、佐藤研究室においては、他大学との合同ゼミを行っているが、その中でこの取り組みを紹介し、まったく浜村地区について馴染みのない先方の大学の学生たちから、まったく馴染みがないからこそ自由に発想できる様々な意見を聴き、それらを参考にその意見を現場に活かすことができないかどうか日々考察しているところである。

加えて、本プロジェクトの目的について述べたいと思う。気高総合支所より佐藤研究室へ依頼のあった当初の目的は、「浜村の魅力を活かした対外的なPR（観光の活性化）」というものであった。しかし、2年前に本プロジェクトへの参加を佐藤研究室へ持ち掛けていただいた当時の気高総合支所の副支所長が隣の鹿野総合支所へと転出されたことと、第1次計画の決定から、観光に加えて、生活の拠点としての気高町浜村地区に焦点が鮮明化されるようになったことから、現在は「住民生活と観光を両立させた持続的なまちづくりによって、浜村の人々の生活をよりよくする」という目的を掲げるようになってきているところである。

2 川口市着眼の経緯

それでは、なぜ視察対象地として川口市を選択したのか、着眼の経緯とともに説明したいと思う。

まず、選択の理由は、川口市の事例を浜村地区の活性化に活かすことができると考えたためである。その事例とは、『ロード・オブ・ONARI〜未来へつなぐ想い〜』という市のPR映画でのまちおこしである。この映画を、佐藤研究室におけるメディア研究¹²の一環として、指導教員の紹介・指導の下、所属学生全員が各自視聴した。その上でこの作品について討論をし

たことが、川口市を選択したきっかけである。この作品は、2022 (令和4) 年1月17日にYouTube上に公開され、現在も無料で公開されている映画であり、現時点で約3万回再生されている¹³映画である。その他、この映画の内容についての詳細は第2章で後述するが、SFのようなコミカルなストーリーが進んでいきつつ、川口市の産業や観光スポットの紹介を無理なく自然に含めることで上手くPRしているところが本作品の魅力である。この魅力的な作品に深く感銘を受け、この制作に携わった川口市役所の職員の方々から制作秘話等のお話を伺い、実際にロケ地巡りもしたいと考えるようになったのである。

埼玉県川口市と鳥取県鳥取市気高町浜村地区では、首都圏と山陰地方ということで、環境等様々な面でまったく異なるように思えるが、地域活性化の手法としては学ぶところが大いにあるのではないだろうかと考えた。そこで、指導教員に相談したところ、現地に行くまでと現地に行きつづけるという条件を充たせば訪問しても良いということだったので、この視察の計画と先方への交渉を開始したのである。

気高町浜村地区には、かつて温泉地として栄えた観光地であったものにも拘わらず、現在これといった観光スポットが少ない。この点においては、川口市と類似していると考えられる。川口市は東京都内に勤め先がある人々のベッドタウン、つまり、生活の拠点としての機能が大きいと考える。これといった有名な観光スポットがないのは気高町浜村地区と同様である。そのため、川口市は気高町浜村地区と同様、観光政策の実施は難しいと考える。

しかし、『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』という市のPR映画によって観光スポットとしての付加価値がつき、今後観光地として変貌を遂げる可能性があると考えられる。実際、佐藤研究室所属の学生たちも全員、この映画を視聴したことにより、実際に現地に行ってみたいと考えたのであり、みごとに映画を利用しての観光スポットの創造に成功しているといえる。このような観光スポットを創り出すという手法は、気高町浜村地区にも当てはめることができるのではないかと考えたことから、単なる川口市への観光ではなく、自分たちが今取り組んでいる気高町浜村地区のプロジェクトへの活用に向けて、比較検討をするために現地視察をしたいと考えるに至った次第である。

第2章 川口市について

1 川口市の概要

川口市は埼玉県の南端に位置し、県内第2の都市である。荒川を隔てて東京都に隣接する地の利から人口増加が続いている。2011 (平成23) 年10月11日には旧鳩ヶ谷市と合併し、2018 (平成30) 年4月1日には鳥取市と同時に中核市へと移行した。合併・移行後の人口数は、約60万人5千人と中核市の中では千葉県船橋市に次いで全国第2位の人口数でもある。また、ここ数年は外国人住民が3万8千人にも増加しており、全国自治体の中では第1位の外国人総数である都市としても有名である。

本市には中央に芝川、東に綾瀬川、南に荒川が流れ、台地と低地からなる複雑な地形の中で、北側の台地では古くから植木や花木等の園芸栽培が行われ、南西部の低地では鋳物や織物、味噌等の醸造業が根付いている。川の恵みとともに、それらはものづくりの街の基礎となり、街の発展を支えてきた。中でも、江戸時代から発展してきた鋳物や植木等の産業は主要産業であるといえる。また、鋳物産業のきっかけとなったのは、江戸時代に栄えた『日光御成道』周辺である。『日光御成道』とは徳川将軍による日光東照宮社参の宿場町であり、その周辺において全国有数の工業都市として成長を続け、「鋳物の街・川口」の名を不動のものにしている。川口市は以上のことを「あいうえおのまち川口」と称し、広報を行っている (表1)¹⁴。

【表1 あいうえおのまち川口】

あ	荒川、芝川。川の恵みに育てられたまち
い	鋳物、機械など。ものづくりのまち
う	植木、花。江戸時代から続くみどりのまち
え	映像産業。SKIPシティで新たな人材を育むまち
お	御成道。徳川将軍日光東照宮社参の宿場町。オートレース・時速150kmを超える迫力のバトル。

一方で、近年は住宅都市化、いわゆるベッドタウン化が急速に進行している。街の玄関でもあるJR川口駅ではペデストリアンデッキ¹⁵が整備され、東口と西口がつながり、華やかな街に変貌した。併せて、かつて多く在った工場群の移転とともに、跡地に高層マンションやショッピングセンター等が建設されており、「住みやすい街」への移行といった新しい文化も産出されている。実際に、住宅ローン専門金融機関アルヒ

発表の「本当に住みやすい街大賞¹⁶」では2019（令和元）年から4年連続で上位にランクインをし、2020（令和2）年、2021（令和3）年においては2年連続の1位を受賞している。また、2022（令和4）年4月25日には、首都高速道路で初の「川口ハイウェイオアシス」が開設され、高速道路の休憩施設と本市が運営する「イナパーク川口」（公園）が連結された¹⁷。

現在、川口市には新しい産業として映像産業の発展が見込まれている。拠点として、SKIPシティ¹⁸をNHKラジオ放送所跡に建設し、国際Dシネマ映画祭を開催する等、デジタルシネマ¹⁹を制作する企業やクリエイターの育成にも取り組んでいる。今後も伝統産業と新しい文化が交差する街としての発展が見込める都市であるといえる。

2 活性化政策の具体例

川口市では、人口増加の要因でもある活性化政策に力を入れている。本章ではその事例として以下の3つを挙げたいと思う。

1つ目に、「1110city.com²⁰」という川口市の魅力発信と定住促進サイトの作成を挙げたいと思う。「住めばわかる川口の魅力」を発信するために、川口市の遊び心溢れるPR動画や若者世代をターゲットにしたパンフレット等をサイト上で公開している。例えば、「お願い住んで川口市」という動画では、市のマスコットキャラクターである『きゅぼらん』が、不動産屋で物件探しを行う家族に川口市に居住することの魅力を発信する内容となっている。

【図1 きゅぼらん²¹】



また、若い世代に向けて将来川口へ定住してもらうことを目的に作られたパンフレットは「イイ。川口²²」と「もっとイイ。川口²³」の二種類作成されている。前者では、本市での休日の過ごし方に焦点を当てており、イメージを持ちやすくするために写真を多用してい

る。また、「川口ストリートインタビュー」という内容を通して、実際に住民の声を発信している。後者では暮らしに焦点を当てて、アクセスや防犯・憩い・子育てといった数種類のテーマから本市を発信する内容で作成されている。

2つ目に、川口市市産品フェアを挙げたいと思う。SKIPシティで開かれる川口市市産品フェアは、製造業・緑化産業を中心に市内で生産される製品や市内で営業するあらゆる業種のサービス等を広く周知するフェアである。本市市役所の産業振興課工業振興係が中心となり、市内のサービスの発信・市内企業の販路拡大と発展を図るとともに、地域経済を活性化させることを目的として開催している。同時に、市民と生活の産業を結び付けることも目的としている。その目的と合わせて、開催のテーマとして「知ろう・使おう・広げよう」というテーマも設定されている²⁴。

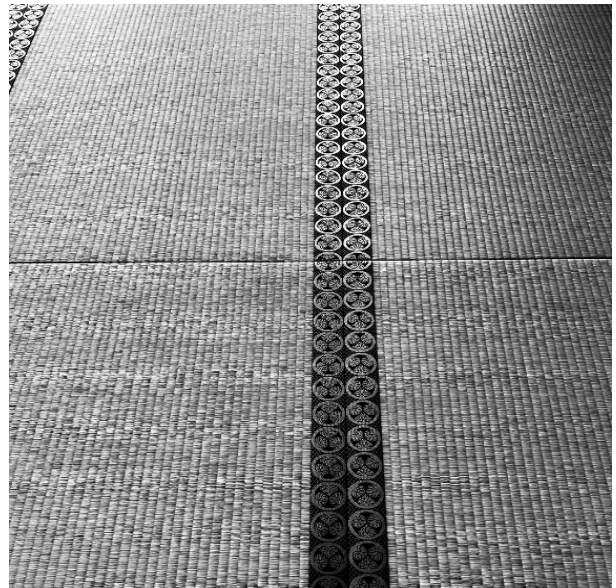
3つ目に、市のPR映画である『ロード・オブ・ONARI〜未来へつなぐ想い〜』の制作を挙げたいと思う。その内容は、埼玉県川口市を舞台に、日光東照宮へ向かう『御成道』で現代へタイムスリップした三代将軍・徳川家光が、現代の川口市の人々と協力しながら江戸時代に戻るための『御成道』の伝説を追うといったものである²⁵。その中で登場する川口名物や川口市の人々との交流から芽生えた熱い友情の場面も見所である。この映画は、2020（令和2）年度に「川口宿鳩ヶ谷宿日光御成道まつり秋絵巻（映画祭）」を実施予定だったが、2020（令和2）年度、2021（令和3）年度とも中止となり、パンデミックの影響下においての無料配信の企画として作成された。秋絵巻のイベントPRとして確保していた予算内で、人流を伴わず『御成道』をPRする映像作品の制作ができないかと考案され、委託業者と協議を重ねる中で持ち上がった企画である。市役所も他機関と連携し、全面協力をしている。例えば、企画内容に沿った市内各所のロケ地の選定への協力、市職員によるロケ地での交渉、市職員約20数名が映画のエキストラとして出演といった内容である。併せて、イオンモール川口店及びイオンシネマ川口に協力を仰ぎ、密に連携を取りながら試写会及び写真展を開催し、本市のPRを行った。特に、舞台挨拶付き特別試写会の観覧応募者数は723名で、全国各地からの申し込みがあり、応募席数倍率は8.52倍であった（応募席数：1313席・当選席数：154席）。県外の主な当選者は山形県・愛知県・京都府・兵庫県等であり、全国各地で本市のPRを行うこととなった。映画制作が広範囲に影響を及ぼすことの証明となろう²⁶。

【写真1 「ロード・オブ・ONARI～未来へつなく想い～」映画ポスター】



元和8(1622)年、第二代將軍徳川秀忠が、日光社参の折(日光御成道)、御休息所となったことが元となり、徳川家と深い関りを持つようになったとされている。『ロード・オブ・ONARI～未来へつなく想い～』内でも、津田寛治氏演じる徳川家光が、江戸時代と現代の両シーンでこの寺に登場した。錫杖寺本堂には、徳川の家紋である三つ葉葵が瓦や、畳縁等至る所で発見できた。江戸時代、三つ葉葵は徳川家が認めたところのみ使用を許されていたため、錫杖寺は徳川家公認の寺であったことが伺える。また、三つ葉葵は徳川家の象徴であるため、三つ葉葵の縁を踏むことはもちろん、寺の柱1本を傷つけたり、汚したりするだけで、徳川を蔑ろにしたことと扱われ、処刑になるという厳しい決まりがあったという。

【写真3 錫杖寺本堂内の畳】



第3章 現地における視察及び調査

今回の埼玉県川口市視察における現地視察及び現地調査の訪問先は、宝珠山錫杖寺、イイナパーク川口・川口ハイウェイオアシス、富和鋳造株式会社、そして川口市役所である。

1 宝珠山錫杖寺

真言宗智山派の寺院である宝珠山錫杖寺は、江戸時代に徳川家が日光東照宮へ行く際、昼食をとった寺院である。

【写真2 錫杖寺本堂】



さらに、大奥最後の御年寄である「滝山」が錫杖寺に葬られている。大政奉還の際、滝山は250人の奥女中に拝領物を与え、江戸城大奥の最後の締めくくりを行った。江戸城から川口市へ向かうときに滝山が利用していた駕籠は、錫杖寺で今も保存されている²⁷。

【写真4 大奥最後の総取締「滝山」の駕籠】



徳川家とのつながりを伺う中で、江戸から新川を挟んで位置する川口市の立地が守りにも適していたため徳川家が休息所として選んだという話があった²⁸。都心から近く利便性の優れた土地であるのは約400年を経た今も変わらないのだと感じた。

『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』撮影時の話では、高層マンションが四方に建つ高層マンションが映り込まないように上から撮影したという人工物が映り込まないための工夫について伺った。

【写真5 錫杖寺から外を見た実際の風景】



さらに、作中では大名が畳の上にそのまま座り、他の人と同じ高さで座っていたが、本来は畳越しに下から狙われないよう厚い畳を敷いて座っていたという裏話まで聞くことができた。お寺の原点である祈りを重んじながら、寺や川口の歴史を未来へ伝えるために、住職としての仕事や映画の撮影協力、SNS広報活動を行っているのだと感じた。

錫杖寺は弘法大師の再来と言われた印融法印ゆかりの寺院であり、談林所として多くの学僧の教育へ力を入れてきた。その伝統は現在の錫杖寺まで引き継がれ、御詠歌や寺子屋等を中心に学びを求める人々の中心の場となっている。寺子屋では談林所の原点に戻り、子どもたちの教育に力を入れている。技術の進歩が続く現代において、実際に寺で学び、泊まるという体験を通して普段とは違う生活の中で、多くの仲間とともに仏の教えを学び、未来へと活かすことを目的としている²⁹。錫杖寺境内には地元の石材加工屋から寄贈さ

れたハローキティの像があり、子どもでも気軽に立ち寄れる寺という印象を受けた。

【写真6 錫杖寺のハローキティ】



前情報なしで視聴した『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』も興味深いものであったが、お寺の方の説明を伺った後の方がさらに映画の内容を理解できると感じたため、本視察終了後に再度、この作品を視聴し、思いをはせた。

2 イイナパーク川口

『イイナパーク川口』は、正式名称を赤山歴史自然公園（以下、公園とする）という。ここでは、その整備の経緯についての詳細と、現地に赴いた上での所感と考察を述べたいと思う。

そもそも、公園の整備は、川口市の市政が始まってから80年もの間、解決し得なかった重要課題に着目し実行に移された施策である。その内容は、「行政が運営する火葬施設の建設」であり、平成13年当初に、市営火葬施設の建設を求める14万人の請願が提出され、川口市前市長である岡村幸四郎氏により実施設計の実現に至った³⁰ことが契機となっている。そして、2012

（平成24）年3月に都市計画³¹として公園の整備が決定³²された。この都市計画決定に至る背景としては、先述した火葬施設の状況に併せ、川口市における公園緑地の状況、計画地の地域特性が挙げられている。公園緑地については、市内に残る緑地の多くが開発圧力にさらされている現状と、当該計画地³³が川口市及び首都圏における重要な緑の拠点³⁴として位置付けられ

ているという事実が裏付けとなっている。

次に地域特性についてである。当該計画地は、豊かな自然環境に恵まれ、近隣には歴史文化遺産を有し、枝ものや植木等川口市農業の中核的存在となっている地域であるほか、周辺には観光・集客の拠点があり、道路網や交通インフラの面についても高い利便性を持っているという特性がある。

この背景があり、都市計画において「広域的な集客制に配慮した『水と緑のオアシス空間』の創出」が計画テーマとして決定され、公園整備は地域の振興や都市農業の活性化にも資するものとされた³⁵。そのため川口市は、首都圏高速道路株式会社との協働によって別途進行していた川口パーキングエリアの整備と一体的に行うことを決定し、地域拠点整備事業「ハイウェイオアシス³⁶」とした。そして公園は翌2013(平成25)年2月に基本設計が完了し、「自然環境や歴史文化遺産を活用した、地域の振興や都市農業の活性化にも資する公園」・「水と緑に囲まれた周辺環境と調和した火葬施設」がその整備方針³⁷とされた。翌2014(平成26)年の2月には実施設計が決定され、市は平成29年5月に公園の看板や刊行物に使用するための愛称を公募³⁸、8月に『イイナパーク川口 (IINA PARK KAWAGUCHI)』として決定した。

整備が進められ、2018(平成30)年には、子ども向け大型遊具(フワフワドーム)、歴史自然資料館、地域物産館を含む公園の一部を開園³⁹し、2022(令和4)年4月25日に全面開園した。

【写真7 イイナパーク川口のポスター】



イイナパークとしての開園後は、高速道路の利用者に潤いのあるスペースを提供するとともに、都市公園等の利用増進が図られている。範囲内に設けられた資料館では、川口市の歴史等を外部の人たちにも伝える工夫が施されているほか、隣接した土産店には、川口市の地場産業である鋳物も展示されており、高速道路から降り立った人々が川口市の文化に触れられる都市施設となっている。

【写真8 イイナパーク川口の全体案内図】



次に、所感と考察を述べる。訪問した川口ハイウェイオアシスは、広々とした緑が多い空間で、パーキングエリアでありながら身近な公園という印象を受けた。居心地の良い空間で、併設のショップも平日ながら多くの客でにぎわっていた。緑豊かな広場の開放感が非常に心地よく、天候の望ましい日に改めて訪問したい。また、川口ハイウェイオアシス内には屋内遊具施設「ASOBooN (アソブーン)」も併設されており、子ども連れの利用者も多くみられた。観光客だけでなく川口市の住民が気軽に利用できるような工夫が感じられた。

イイナパーク川口内の歴史資料博物館では、過去の日光御成道まつりの資料映像を視聴することができた。たくさんの人々が武士や姫、従者等々に扮し、市内を闊歩している様子が映し出されており、祭りの盛況具合を知る事ができた。また、ジオラマや写真等で川口市の歴史・文化・自然について展示されており、

川口ハイウェイオアシスと連結していることで、市民が改めて居住区たる川口市について知り得る憩いの場となると同時に、川口市に立ち寄った観光客の心を動かすものになっていると感じた。火葬施設も、敷地内から見える範囲にあったものの、景観に配慮された外観をしており、まちなかに火葬施設を設置する場合の配慮を今まで考えたことがなかったことに気付かされた。鳥取では火葬施設が山中にあるため気にならなかったが、まちなかにいきなり火葬場があれば日常からあまりにも浮いてしまうため、カモフラージュされた見た目にする必要があるのだと、まちづくりの観点でも学びになった。

【写真 9 赤山陣屋の案内】



【写真 10 赤山陣屋のジオラマ】



視察中、川口市内を十分に散策できたとはいえないため、実際に川口市の緑地がどれほどなのか体感することは叶っていないが、敷地内に入る沿道の草花をはじめ、広場の芝生と敷地を囲む植木が、景観の良さを感じさせる。基本設計資料にもある通り、パーキングエリア・都市公園・火葬施設が一体となった拠点は珍しいものであるが、自然景観と観光ショップ・遊び場、さらに歴史資料館が学びの場の役割を果たし、地域の魅力を観光客・地元住民に問わず発信する拠点として川口市の発展に積極活用されるのではないかと考える。

3 富和鑄造株式会社

鑄物は川口市の地場産業である。川口市には、鑄物の原料となる鉄を溶かす溶解炉「キューポラ」をモチーフとした『きゅぼらん』というマスコットキャラクターがいる。そして、現在キューポラを見ることができる工場は数箇所となっており、富和鑄造株式会社はそのうちの1つであり、下水道のパイプや産業機械の鑄物を製造している。

【写真 11 富和鑄造株式会社入口】



【写真 12 キューポラ】



【写真 13 「とりりん」と「きゅぼらん」】



この工場では、川口を代表する産業の1つとなっている鋳物を製造しており、幕末には津軽藩から依頼を受けて18ポンドカノン砲を製造したのだという。現在でもこの大砲の復元品を見ることができ、観光スポットの1つとなっている。鋳物とは、高温で溶かした金属を、砂で作った型の空洞部分に流し込み、冷やして固めた製品のことで、現代でも様々な場所で活用されているものである。そして、この鋳物を製造する際の液状にした鉄を鋳型に流し込む注湯という作業は1日に数回しか行われぬ作業で、私たちが訪問する時間帯に行われるように調整していただき、実際にこの作業を目近で視察させていただいた。

作業を見学させていただいている間に、この工程では「成分調整と温度管理」が材質における直結ポイントであるため非常に重要であり、長年の作業の中で成功率が高くなるように情報収集を行い、ノウハウを磨いてきたのだとお聞きした。その中でも特に温度調整については、クレーンの操作テクニックやスピード感、チームワークが重要となってくるものであるため、危険な現場であるが機械化されることなく今でも人の手で行われているということを知ることができた。

注湯を見学させていただいた後は、工場前に設置されている大きな鉄球についてのお話を現代の名工⁴⁰の称号を得られている方に伺うことができた。その鉄球は以前、地上波で放送されていたバラエティー番組『ほこ×たて』に出演した際に使用されたものであるとのことであった。当番組内で富和鋳造が作成した鉄球は「どんなものでも破壊する鉄球」として紹介がされており、絶対に壊れないとされているものと何度も対決を行い、連戦連勝という結果を残した。この勝利によって富和鋳造で製造されている鋳物の知名度はさらに上がり、日本全国に富和鋳造の技術力の高さを知らしめることができたと話しておられた。

富和鋳造で見学させていただいた注湯という作業は、鉄が液状になるのに必要な温度は1500度以上であるため、液状になった鉄が鋳型に流し込まれると、たくさんの火花が散り、非常に危険な作業であるということをお私たちがでもひしひしと感じることができた。そんな危険な作業であるにも関わらず、現場で作業を行っておられる方々は非常に慣れた手つきで落ち着いて作業にあたっておられた。危険な作業ではあるものの、作業工程や作業に使用される道具等にはこれまで長い年月をかけて改善されてきた点が多く見受けられ、人々がこれまで引き継いできた技術をいたるところから感じることもできた。また、危険な作業であるが人の手で行われるからこそ液状になった鉄が冷え固まる際に密度が均一になり、強度が高くなるのだ

ということが分かった。このことから、機械化が進む現代では、人の手で行われる作業が工場においても減少傾向にあるが、人の手でしか再現できない技術や製品が数多く存在しているということを改めて実感させられた。そのため、機械では再現できない伝統的な技術が引き継がれるように保護しつつ地域活性化に生かしていくことが必要であると考えさせられた。また、以前までは川口駅周辺地には鋳物工場が乱立していたが、都市開発が行われるようになったことを契機に川口駅周辺地にはビルが数多く建設されるようになり、多くの鋳物工場が廃業に追い込まれることとなった。都市開発が進むことで交通利便性や施設の充実等生活の利便性が向上し、住みやすいまちとなることで地価が上昇することとなり資産価値が上がるため、川口市としても大きなメリットがあることは間違いない。しかし、都市開発が進むことで鋳物等の地場産業が衰退し、その土地の伝統的な技術が失われるというのは重大な問題であると考えた。そのため、今後都市開発を行っていく際には、その計画を進めても地場産業を維持することができるかという点にも着目し、都市開発と地場産業の維持の両立ができないかを検討する必要があると考えた。

【写真14 作業の様子】



4 川口市役所及びデイジイ

川口市役所の庁舎を訪問した。この庁舎も『ロード・オブ・ONARI〜未来へつなぐ想い〜』の重要な舞台である。本作の重要なシーンに、この本庁舎の屋上から川口市内を一望するというものがあるのであるが、あいにく当日は荒天だったために屋上へ上がることは叶わなかった。次回訪問した際には是非訪れたいと思った。

川口市役所訪問では、産業振興課商業観光係の職員の方々から観光や防災、川口市の特徴等様々な観点からのお話を伺った。その中で、特に大きな観光名所がない市でどのように観光を推進していくのかというお話は現在我々が携わっている浜村地区活性化学生プロジェクトでも話し合いが行われているということもあり、今後の活動に関わる有効な情報を得ることができた。昼休みには、若手職員の方々に市役所での業務や就職活動に関する質問に答えていただく時間を取っていただいた。

民間企業での就業経験のある職員の方は、民間企業との違いとして、従業員（職員）同士の競争がなく、チームで協力して働くことが多いということを挙げていらっしやった。併せて、就職後のビジョンを考えて入りたい課を探してみることも印象的であった。また、当該課での業務内容について、商店街活性化のための事業等についてお伺いすることが出来たため、商業観光係の業務内容について理解が深まった。

【写真 15 川口市役所外観と視察当日の会議室の表札】



昼休みに関連して、私たちが、昼食に購入したパンの店舗、川口市で有名なベーカリーである「デイジイ」を紹介する。デイジイ⁴¹は1962（昭和37）年に川口市で創業、現在は埼玉県と東京都に関連店舗を合わせて計17店舗展開しており、店舗の出入りが激しく、競争も多い東京駅にも出店しているほどのベーカリーである。パン以外にも、ケーキや焼き菓子を取り扱っており、パティスリーとしても愛されている。事前に昼

食の購入先を検討していた際、農林水産大臣賞を取ったパンが売られているベーカリーがあると知り、ここで購入することを決めた。それは、「クロワッサンB.C.」というパンである。このパンは、1996（平成8）年に開催された第4回「バターと生クリームを使ったプロによるパン洋菓子コンクール」のパン部門においてグランプリの農林水産大臣賞を受賞した。その後、全国パンフェスティバルの第2回大会で全国一位になる等殿堂入りも果たし、テレビやメディアで話題となっている。店舗内に入ると、平日であったが客が多かった。作りたてのパンを陳列するために、その日に売れそうなパンを小ロットで回転させて、焼き上げているという。そのため、人気商品のクロワッサンB.C.は残り少なくなっていた。市役所で昼食をとった際には時間が経っていたが、外のサクサク感と中のしっとりとした生地が非常に美味しかった。クロワッサンB.C.のBはバター、Cはクロワッサン・クッキー・ケーキを意味しており、パンとお菓子が融合したような食感であった。市役所職員の方が、川口市には地元で有名なケーキ店があり、パンも含めて美味しいスイーツ取扱店が多いまちであるということをお話いただいた。

【写真 16 クロワッサンB.C.】



また、事前に職員の方々にお渡しした観光行政全般についてのアンケートへの質疑応答を行っていただいた。そのアンケートと回答については表2・3の通りである⁴²。行政目線では「住みよいまち」を作るために、交通や不動産、自然環境等を重要視している。併せて、その「住みよいまち」を継続させるために市民参加と協働を考慮している行政は、「川口市市民参加条例」等を踏まえ、積極的に市民が街づくりに参加できる体制を整えている。また、商業観光係の業務内容とも関連するが、人口減少が進む中で問題視されるシャッター街の増える商店街等の諸問題について補助金の面から解決のために取り組んでいる。

【表2 まちづくりについての質問と川口市側の回答】

住みよいまちランキングで上位に躍り出るための行政からみたポイントは何にあるか教えてください。
市の全体的なバランスの良さであると考え。都内へのアクセスの良さ、地価がリーズナブル、買い物環境や子育て環境の充実、荒川の河川敷を始め、郊外には自然環境が整っている等が挙げられる。
地域資源について、住民の自覚や意識向上は重要だと考えるかどうかについて教えてください。
重要であると考え。前提として市の主役は行政ではなく、市民である。市民が街づくりに積極的に関り、愛着が持てる街づくりができれば、市民自身が自主的に市のPR活動を行ってくれる好循環を創出することができる。
上記を達成するためにどういった施策・工夫をしているかについて教えてください。
本市は、市民参加と協働によるまちづくりをさらに推進するため、自治体の構成員である、市民・議会・市長及び執行機関の役割や責務、基本原則を定めた市独自の「川口市自治基本条例」を定めている。市民が積極的に市政に参加できる行政を推進している。その中で、毎年市民意識調査を行い、市の街づくりに対する市民の評価や意見を伺っている。
まちづくりにおける住民の参加機会はありますか？
本市は、「川口市市民参加条例」を策定しており、市民参加の方法には、意見聴取と意見提出の2つの方法がある。前者は、市政に関する重要な各施策についての意見聴取の場を設け、市民の意見を聴いている。後者は、市政に対する意見が提出された際は、市は誠実に回答するよう努めている。
その機会での住民の参加は十分ですか？
十分とは言えないと考える。受け身ではなく、能動的に市職員自ら現地に訪問したり、市民に直接話を聴いたりすることで、市民ニーズの把握に努め、政策に反映していく必要があると考える。

【表3 移住者についての質問と川口市側の回答】

移住してきた人が新たに事業起こした事例(移住者の特性)
本市もいずれ人口減になることは明白であり、対策を講じていかなければならないが、現状、移住者向けの政策は存在しない。しかしながら、大型店の開店や後継者不足等の問題によりシャッター商店街になりつつあるところもあり、新たに商店街の組合員になることを条件に新規店舗を開店するための資金を補助している。

第4章 考察

1 視察から得たこと

第2章第2節で紹介したように、埼玉県川口市では地域における活性化政策が盛んに行われている。今回の視察において、その様子をつぶさに目にすることができた。

先述の通り、川口市では、「定住促進」と「観光振興」という、一見して両立が難しい2つの政策が同時に行われている。両者のうち、視察を通して強く感じたのは「観光振興」に力を入れているということである。今回の視察実施のきっかけとなったのが『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』⁴³であったことから観光を主眼とした取り組みが成されていることは予想していたところであるが、実際に現地でお話を伺ったのが、川口市役所産業振興課の職員の方々であったことからその印象を強く感じる事ができた。

しかし、川口市自体に有名な観光スポットがあるのかと問われれば、答えは否とならざるを得ない。産業振興課の職員の方々にお話を伺った際にも、「川口にはわかりやすい観光地がない」との発言があった。それでは、川口市ではどのように観光の振興を行っているのだろうか。川口市は資源が乏しいことが課題であると考えられているため、身近なものを観光資源に変えるようにしているようである。例えば、ラーメンやスイーツといったグルメを推したイベントを企画する等、日常に溶け込んでいるものを新たな観光資源として仕立て上げており、また、それが成功しているようである。

そして何より、今回の視察のきっかけとなった『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』である。先述したように同作品は、市外部に対して、川口市の全体やロケ地となった錫杖寺をはじめとした各所を紹介するだけではなく、市内としても、行政と各所との繋がりを生むという功績を残しているといえるだろう。川口市では、このように観光資源を自ら発掘し、全国に発信することができているといえる。今回の視察でロケ地を巡った際にも、観光地として特に目立つスポットはなかったように思えた。しかし、よく目をこらせば、地域に溶け込んでいるスポットはたくさんあり、映画による事前知識がなければ立ち寄る機会がなかったであろう名所はたくさんある。ではなぜ、それらのスポットを観光で持ち上げることができたのだろうか。それは、川口市で昔から続いてきた歴史がしっかりと受け継がれているからだといえるだろう。

2 中核都市への移行

川口市は2018（平成30）年4月1日に中核市へと移行している。「中核市」とは、都道府県が行っている事業の一部を人口20万人以上の市に移譲し、より身近な行政を行うことができる制度のことである。これにより川口市は埼玉県から多くの事務権限が委譲されることとなった。中核市になれば地域の特性を活かしたまちづくりができるようになることから、理想とするまちの在り方を目指しやすくなったといえるだろう。しかし、川口市が押し進めている観光についてはやはり、観光資源の乏しさが壁となっている、この点については、実際に視察を行う中でも感じることであった。訪問した先々でそれぞれの魅力や価値等に触れることはできたが、それは私たちが視察として学ぶ視線で訪れていたことや、市役所職員の方々から詳細な解説を伺いながら見学させていただいていたことも関係しているのではないかと考える。どの訪問先も歴史や地域の特徴が表れた素晴らしい場所であった。しかし、何も知らない人が、ふらっと立ち寄りたくなるような観光資源は、川口市にはあまり多くはない。

今回視察してわかったことは、現時点では「住みやすい街」としての側面が強いということである。しかし、職員の方からお話を伺う中で、川口市は今後観光面の発展を目指されていることもわかった。中核市へ移行したことは、この点においても条約制定や観光資源の発掘等の面において、市がある程度独自性を打ち出して行うことができるという利点に繋がっていると考えられるのではないだろうか。また、浜村地区についても同様に、2018（平成30）年4月1日に同地区を内包する鳥取市が中核市へ移行している。浜村地区としては、川口市の事例とは異なり市全体としてではなく、市の一部である気高町の、そのまた一部の地区であり、規模がまったく異なるといえる。しかし、鳥取市自体が川口市と同様に中核市へと移行した点から鑑みれば、鳥取市自体が川口市と同様に、中核市になったことで理想的なまちづくりをしやすくなったと考えることができ、それに応じて、気高町も、浜村地区も理想的なまちづくりをしやすくなったと考えることができるようになるのではないだろうか。とはいえ、川口市の人口は約60万人、これは鳥取県全体の人口さえも上回る数値であり、中核都市となったタイミングは同じであったとしても、その規模の差は明らかである。そのため立地による利便性や資金面等、同じ条件とはいえない。しかし、理想とするまちづくりの在り方や現在のまちの在り方、といった点で両地域には共通点があるのではないだろうか。

3 浜村地区との類似点

今回の視察を通して川口市が行っている産業振興の実績について触れることができた。しかし、今回の視察で私たちが実感したのは、先述の通り、「住みやすい街」としての川口市であった。つまり、ある意味観光客として川口市を訪れたのにも拘わらず、観光地としての印象よりもベッドタウンとしての印象を強く感じたのである。まず、駅の改札を抜けるとすぐに「住みやすい街第1位」の文字が飛び込んでくる。第2章で述べた通り東京との都県境であるという立地も影響し、実際の川口市は生活の拠点としての役割が大きい。まさに東京に働きに行く人たちのベッドタウンなのである。街を行く人々も、観光客というよりも通勤・通学を目的とした人が多い印象であった。そのためここが観光地であるとの印象はほとんど受けなかった。先述したように行政側が行っている政策は2つに分かれている。川口市は「観光」に力を入れつつも、その実態は生活拠点であることから、生活拠点であるという実体に「観光」という付加価値を付けようとしているのではないかと感じられた。観光を進める方向に進むべきか、住みよい街としての在り方を貫いていくべきか。この点は、現在の浜村地区の状況と非常に良く似ていることに気が付いた。というのも、観光に力を入れるとその地が観光地化することとなる。その結果「住みよい街」という側面が希薄になっていく危険性があるからである。特に、川口市は既に「住みよい街」としての地位を確立しているほど生活基盤としての性格を有している地域であるといえる。そのため「観光地」としての性格を付加しすぎることによって、「住みよくない街」となりやすい状況にあるのではないだろうか。

先述したように、浜村地区においては、佐藤研究室に相談依頼がきた当初、観光を主眼とした活性化を目指すということであった。しかし、現在のプロジェクトにおいては住民主体の、住みやすい生活拠点としてのまちづくりに重点が置かれている。現在の浜村地区では、観光でまちを活性化したいという想いと、住みやすさを維持したいという想いが混在しているといえる。現状、浜村地区は観光面での特徴はほとんどなく、生活拠点としての特徴の方が強い地域であるといえる。確かに、かつては温泉地として、「浜村温泉」という有名な大観光地としての特徴を有していた地域ではあった。しかし、現在においては、その観光地としての繁栄は見えない。現在、浜村地区には、住民向けの共同浴場⁴⁴と旅館が1軒あるのみで、温泉地としての『浜村温泉』の観光は衰退しているといえる厳しい状況にある。

そもそも、浜村地区は周辺地域との「小さな拠点事業⁴⁵⁾」において生活の拠点としての役目を担っている地域である。移動には自動車を保有していないと厳しい部分もあるものの、駅の周辺にスーパー等の生活に必要なものを手に入れるには十分な店舗が集中していることから、暮らしやすい街であるといえるだろう。とはいえ、住民や気高総合支所が望んでおり、我々がプロジェクトの目的として掲げている「観光と住民生活を両立させた持続的なまちづくりによって、浜村地区の人々の生活をよりよくする」ということのように、観光面が重視されているということも事実である。観光促進としては、共同浴場を一般開放する等の取り組みが検討されているが、現在はまだ開放には至っていない。また、共同浴場を一般開放したとしてもかつて繁栄していた「浜村温泉」を復興することはできない。そこで、川口視察の経験を活かし、新たな観光スポットを創造する必要があると感じている。

川口市の事例において、日常に溶け込んでいるものを観光資源に仕立て上げることがあった。グルメの例がそうである。例えば、デイジイの事例が考えられるだろう。デイジイというパンの製造と販売をしている店舗の存在は川口市民にとっては、観光資源ではなく、日常の食料品店の1つであろう。実際、指導教員も良く買いに来ていたそうであるし、立ち寄ったときも近隣の工場や作業場、会社などに勤める方たちが買い物をしてきた。つまり、日常に溶け込んでいるといえるのである。しかし、ここはただのパン屋ではない。川口市を訪れる観光客からすると「農林水産大臣賞を受賞した有名なパンがあるならぜひとも一度食べてみたい」という思いが生じ、有名なパンが観光客の目を引く観光資源となることもあるのである。

このことを浜村地区にあてはめて考えてみると、焼き菓子店「はこぶね」がそれに該当する可能性があるのではないだろうか。浜村地区の住民からすれば、日常に溶け込んでいる菓子店であるが、可愛い店の外観やこだわりのお菓子は浜村駅前に立ち寄る観光客の目を引く観光資源となり得る。川口市のデイジイのように、まだ知名度はないが、観光資源に仕立て上げることは可能であると考えられる。このように、川口市視察では、浜村にあてはめられることや参考となる知見を多く得ることができた。浜村と川口という一見まったく共通点のない2つの地域に共通している、「観光と住民生活の両立が課題である」ということを今回の視察を通して学ぶことができた。今回の知見を今後も浜村地区活性化プロジェクトに反映させていきたいと考える。

おわりに

今回、川口市を舞台とした『ロード・オブ・ONARR I～未来へつなぐ想い～』という作品との出会いをきっかけに、川口市の観光行政について視察を行い、学生たちも様々なことを学ぶことができたようである。本調査で得た地域資源の活かし方や発信の仕方等観光行政の知見を参考に、浜村地区活性化学生プロジェクトでの活動を通し浜村地域の活性化に貢献させていただく所存である。

今回の視察の前日、都内にある他大学で浜村地区地域活性化プロジェクトについての発表を行った。相手は浜村に一度も訪れたことのない、その日にはじめて浜村の存在を知ったという学生たちである。佐藤研究室の浜村での活動を聞いたそれらの学生たちは非常に興味を持ってくれたようであった。その後、このプロジェクトについてのグループワークを行ったのだが、はじめて聴く浜村地域について非常に参考となる提案をいくつも聴くことができた。佐藤研究室の学生たちももう2年間も浜村地区に関わっていることから思いきった提案ができなくなっているが、浜村地区の実情を知らない他大学の学生たちの方はそれを活かして思いきった提案をしてくれたのが印象的であった。研究室の学生たちもその提案を参考にさらに色々考えていきたいとのことであった。

さて、今後であるが、今回の川口市との出会いから本文でも述べているように鳥取市と川口市というまったく同じ時期に中核市となった都市間の比較研究を佐藤研究室では行っていく予定である。なお、これは観光面に限らない。

川口市の職員の方からのお話の中に、西川口のことがあった。かつて西川口は所謂風俗街であった。2005(平成17)年に埼玉県警が「風俗環境浄化重点推進地区⁴⁶⁾」に指定し一斉摘発を受けたことで風俗街は衰退し、入れ替わる形で外国人が多く居住し「西川口チャイナタウン」と呼称されるまでになった。西川口では、日本語の全く通用しない店も少なくないようである。川口市では、そうした状況を受け治安・衛生維持のためNPO法人と連携しながらまちづくりに取り組んでいる。ある職員の方からは、横浜中華街のようにならないかなという話も伺った。

このように地域の可能性を感じられ、多くの知見を得られる有意義な視察だったと思える。今後も研究室としての活動を川口市、鳥取市で進めていきたいと思う。

註

- 1 最近の活動では、現役の裁判官・検察官・弁護士を大学に招いて実施した模擬裁判と裁判員実習の様子が令和4年5月19日の読売新聞に『鳥大学生ら模擬裁判体験』として、公正取引委員会中国支所の職員の方々を招いて実施した独占禁止法研修の様子が令和4年5月31日の日本海新聞に『公正な市場競争学ぶ鳥大で「独占禁止法教室」』として、令和4年6月3日の読売新聞に『価格競争ゲームで体験鳥大で「独禁法」講座』として報道された。
- 2 本調査は、鳥取市と佐藤研究室の共同研究であり、『鳥取市町内会加入の実態と組織運営の現状についての調査研究報告書』（令和3年3月）にその調査結果をまとめている。
https://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1644365832698/simple/kyoudousuisinka_chounaikai.pdf (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 3 プロジェクトの経緯については本稿第1章1にて詳説する。
- 4 浜村地区活性化委員会とは、まちづくり実施計画策定のため、2020（令和2）年9月に地域活動団体・有識者等によって立ち上げられた委員会である。18名の委員と景観・空き家のオブザーバー各1名、佐藤研究室所属の学生アドバイザー3名で構成されており、委員会には気高支所の職員も参加する。浜村地区活性化委員会『浜村地区まちづくり実施計画』（令和4年2月）9、10頁参照。
- 5 委員会の班は、1班「住民がつながるまち」、2班「空き家の活用と美しい街並みのまち、気軽に商いができるまち」、3班「みんなが気軽に温泉に入れるまち」という構成である。1班の「住民がつながるまち」は、世代間交流や、高齢者の活躍を促進することによって住民同士のつながりを強めようとするものである。具体的な活動内容としては、地域の人材バンクづくりを一からつくるということを企画されている。2班の「空き家の活用と美しい街並みのまち、気軽に商いができるまち」は、景観を良くして観光客が来やすくなること、地域の空き家を利用して、移住者を含む住民が商いをしやすくなるものである。具体的には、商工会議所の方を中心に植栽マスを活用すること、空き家バンクづくりが進められている。3班の「みんなが気軽に温泉に入れるまち」は、浜村地区の地域資源である温泉の活用を促進しようとするものである。具体的には、住民のみが入湯可能な共同浴場の一般開放に向けて、活動が行われている。
- 6 鳥取市『浜村地区まちづくり実施計画』55頁参照。
- 7 浜村駅の周辺はかつて温泉街として賑わっていた。しかし、現在多くの温泉旅館が閉館しており、廃墟のように立ち並んでいる。温泉は共同浴場や数少ない旅館で使用されている。
- 8 コミュニティカフェは「喫茶ミラクル」というカフェである。このカフェは、元理容室とスナックを改修して作られ、週に3日営業している。主に移住者の拠点、地域住民との交流の場として機能している。喫茶ミラクル Instagram アカウント、ステータスメッセージ参照。
https://www.instagram.com/miracle_tottori/?hl=ja (2022年6月15日閲覧及び確認)
焼き菓子店は、「はこぶね」という浜村駅前の通りにある小さな菓子店である。鹿野町出身の店長によるこだわりの焼き菓子は、非常に人気で売り切れることもよくある。とっとりずむ「[焼き菓子店ははこぶね]「体に優しい」を目指すナチュラル素材にこだわった焼き菓子のお店 - 鳥取市浜村」参照。
<https://tottorizumu.com/yakigasiten-hakobune/> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 9 ヤサホーパークは、丘と足湯と遊具がある公園である。正式名称は、気高町浜村砂丘公園。「ヤサホー」とは浜村に伝わる踊り、貝がら節の掛け声である。浜村地区の子育て世代がよく利用する公園で、子どもたちの遊び場となっている。鳥取市観光コンベンション協会による Facebook の投稿参照。
<https://m.facebook.com/1127527833973396/posts/3729458690446951/> (2022年6月14日閲覧及び確認)
鳥取市「気高町浜村砂丘公園・気高町北浜公園・鹿野町温泉公園・鹿野町越路ヶ丘公園・青谷町空浜公園のご案内」施設の概要参照。
<https://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1398988477400/index.html> (2022年6月14日閲覧及び確認)
- 10 註6前掲資料55-58頁参照。「浜村地区まちづくりランドデザイン」とは、浜村地区が取り組むべき課題やテーマを示し、ここで安心して暮らしていける事柄を体系として分類し、課題解決の方向性をまとめたものである。このことにより行政、地域の組織・団体等様々な主体が担うべき役割が明確になった。このランドデザインをもとに作られたのが1～3班のテーマである。また、「小さな拠点事業」にも言及しており、浜村地区が気高地域の人々の生活の拠点としての役割を担っていくことが明記されている。
- 11 住民企画の温泉イベントとは、2022年3月27日に活性化委員会3班の委員たち地域住民による、共同浴場の入浴体験である。新泉共同浴場と旅館「貝殻節の里 旅風庵」の温泉の入浴体験が1人500円で出来るイベントとなっており、周辺飲食店のランチ営業、雑貨販売、地域の喫茶店のサンドイッチ販売等が行われた。また、体験入浴のおまけとして、「はこぶね」の焼き菓子が参加者に提供された。10時～14時のイベントで、参加者は15人程度であったが、今後も行き、地域での知名度を上げていくことで新泉共同浴場一般開放に向けていく予定であるという（活性化委員会3班委員談）。
- 12 佐藤研究室では所属の学生全員で同じ映像作品等を視聴し、その作品の周辺知識や作者が訴えたいことは何か等その内容について討論する「メディア研究」という勉強会を休日、定期的に行っており、既に卒業した卒業生たちも多数参加している。また、他大学の大学院生等の外部講師も参加している。今回の訪問及び視察のきっかけとなった『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』もその一環として視聴し、討論した。なお、これまでに扱った作品は、『復活の日』・『恋はデジャ・ブ』・『白ゆき姫殺人事件』・『39 刑法第三十九条』・『翔んで埼玉』・『シン・ゴジラ』等。
- 13 川口宿場ヶ谷宿日光御成道まつり実行委員会『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』YouTube 動画参照。
<https://www.youtube.com/watch?v=nyIkXh1Wwso&t=1342s> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 14 川口市視察当日配布資料参照。表1は、当日配布資料をもとに作成。「あいうえおのまち川口」と称して、市の特徴や特産品を紹介している。
- 15 ペDESTリアンデッキとは、高架等で設置された歩行者専用通路のことをいい、建物の入り口まで続く構造となっている。

- 16 「本当に住みやすい街大賞」とは住環境, 交通の利便性, 教育・文化環境, コストパフォーマンス, 発展性の5つの基準を設け, 住宅専門機関アルヒの膨大なデータのもとに住宅や不動産の専門家が関わる選定委員会による公平な審査をしている。そして, 本当に住みやすい街を選定することで人々の住まい選びの参考になることを目的としたランキングとなっている。
- 17 川口市経済部産業振興課「総合案内版川口市内観光ルートマップ」(2021年埼玉県川口市市役所経済部産業振興課商業観光係)参照。ハイウェイオアシスとは, 高速道路の休憩施設と都市公園等とを一体的に整備し, 高速道路の利用者にゆとりのあるスペースを提供するとともに, 都市公園等の利用増進を図る施設である。そのため, 2022(令和4)年4月25日にオープンした川口ハイウェイオアシスは, 水辺と木々の緑に彩られた自然豊かな公園であるイナパークと一体的に整備するため, 連結した。「川口ハイウェイオアシス～食べる, 遊ぶ, くつろぐ。水と緑のオアシス空間が誕生～」参照。
<https://www.kawaguchi-highwayoasis.com/> (2022年6月13日閲覧及び確認)
- 首都高速道路株式会社『『イナパーク川口』2022年4月25日(月)全体開園～首都高初のハイウェイオアシス『川口ハイウェイオアシス』誕生～』参照。
https://www.shutoko.co.jp/company/press/2021/data/02/21_press_kawaguchi_hwo/ (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 18 SKIPシティとは, 「埼玉県内中小企業の振興」と「映像関連産業を核とした次世代産業の導入・集積」を基本方針に, 民間の持つ技術力等の活用から企業の技術開発を支援し, 国際競争力を備えた県内産業の振興, 映像関連産業の集積する国際的な拠点づくりのために整備された。現在は, 「彩の国ビジュアルプラザ」や「埼玉県産業技術総合センター」, 「埼玉県生活科学センター(彩の国くらしプラザ)」, 「川口市科学館(サイエンスワールド)」, 「NHKアーカイブス」等の施設が一般に利用・公開されている。埼玉県「SKIPシティ」参照。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/shisetsu/shakai/003.html> (2022年6月13日閲覧及び確認)
- 19 デジタルシネマとは, フィルムを使わずデジタル方式で撮影し, 上映する映画の事である。田副暢宜プロジェクト「JAPAN デジタルシネマ」参照。
<http://digitalcinemasociety.com/#:~:text=%E3%83%87%E3%82%B8%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%83%8D%E3%83%9E%E3%81%A8,%E6%98%A0%E7%94%BB%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82> (2022年6月16日閲覧及び確認)
- 20 「1110.city.com 川口市の魅力発信と定住サイト」(1110city.com 運営委員会)参照。
<https://www.1110city.com/> (2022年6月13日閲覧及び確認)
- 21 註20前掲サイト内「きゅぼらん」の頁参照。
<https://www.1110city.com/cupolan/about.html> (2022年6月16日閲覧及び確認)
- 22 註20前掲サイト内「イイ。川口」参照。
https://www.1110city.com/ii-kawaguchi/index_vol1.html (2022年6月16日閲覧及び確認)
- 23 註20前掲サイト内「もつとイイ。川口 Vol. 2」参照。
https://www.1110city.com/ii-kawaguchi/index_vol2.html (2022年6月16日閲覧及び確認)
- 24 川口市「川口市市産品フェア」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01110/030/3/2067.html> (2022年6月24日閲覧及び確認)
- 25 前掲註13参照。
- 26 前掲註14参照。
- 27 「浮間わいわいねっと」参照。
<http://www.ukima.info/meisho/kawaguti/shakujo/hondo.htm> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 28 ニッポン旅マガジン『錫杖寺』参照。
<https://tabi-mag.jp/sa0162/> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 29 宝珠山錫杖寺公式Webサイト内「学びの365日」参照。
<https://www.shakujouji.jp/%E9%8C%AB%E6%9D%96%E5%AF%BA%E3%81%AE365%E6%97%A5/%E5%AD%A6%E3%81%B3%E3%81%AE365%E6%97%A5> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 30 前川口市長である岡村幸四郎氏が現職4期時点で立候補した市長選において, 立候補者の街頭演説として応援演説を行っていたその内容に「市営火葬場の建設」に係る請願とその実施計画について触れられている。まっすぐ進む! 川口市議会議員松本すすむのWebページ内「川口市長選挙で応援演説を行う(5月15日)」参照。
<https://www.komei.or.jp/km/kawaguchi-matsumoto-susumu/2013/05/20/%E5%B7%9D%E5%8F%A3%E5%B8%82%E9%95%B7%E9%81%B8%E3%81%A7%E5%BF%9C%E6%8F%B4%E6%BC%94%E8%AA%AC%E3%82%92%E8%A1%8C%E3%81%86%EF%BC%88%EF%BC%95%E6%9C%88%EF%BC%91%EF%BC%95%E6%97%A5%EF%BC%89/> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 31 埼玉県川口市旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム「都市計画公園の変更及び都市計画火葬場の決定について(平成24年3月)」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01130/090/project/4080.html> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 32 川口市市長室広報課「広報かわぐち(2014年2月号No781)」(2014年埼玉県川口市役所市長室広報課)参照。
- 33 川口市提示の公園・火葬施設の整備は川口市神根地区の赤山及び新井宿の地域の約8.9haを範囲としている。川口市「都市計画公園の変更及び都市計画火葬場の決定について(平成24年3月)」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/gaiyou.pdf> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 34 註31前掲計画地は, 良好な自然環境を有する緑地の保全に関し必要な事項を定めることにより, 近郊整備地帯の無秩序な市街地化を防止し, 首都圏の秩序ある発展に寄与することを目的とする「首都圏近郊緑地保全法」に基づく安行近郊緑地保全区域として設定されている。国土交通省『「首都圏近郊緑地保全制度」について』参照。
<https://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/shuto/7/images/shiryoku6-3.pdf> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 35 川口市都市計画部赤山歴史自然公園整備室旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム「ハイウェイオアシス整備に至る経緯」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/keii.pdf> (2022年6月15日閲覧及び確認)
- 36 前掲註17参照。
- 37 川口市都市計画部『赤山歴史自然公園整備室旧歴史自然公園火葬施設整備室火葬施設整備事業「(仮称)赤山歴史自然公園及び(仮称)川口市火葬施設の基本設計について」』参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/kihonnsekkeisiryoku_01764442.pdf (2022年6月15日閲覧及び確認)

- 38 埼玉県川口市旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム（平成 22 年 10 月 1 日～24 年 3 月 31 日）内「赤山歴史自然公園の愛称が決定しました（平成 29 年 8 月）」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01130/09/olddivision/5/3742.html> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)
- また、同内容は産経新聞にも掲載された。産経新聞「『イイナパーク』をよろしく川口『赤山歴史自然公園』の愛称決まる」2017 年 9 月 18 日
<https://www.sankei.com/article/20170918-W2YMJQB3NVLV5HU2VXFEOJGLE4/> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)
- 39 川口市市政情報街づくり・都市計画赤山歴史自然公園整備事業「イイナパーク川口の整備の進捗状況について（令和 2 年 11 月）」参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/shiseijoho/machidukuri_toshikeikaku/8/37157.html (2022 年 6 月 8 日閲覧及び確認)
- 33 「現代の名工」とは、「技能者の地位と技能水準の向上を図るために設けられた、卓越した技能者表彰制度に基づき、厚生労働大臣によって表彰された卓越した技能者（卓越技能者）の通称」である。富和製造で案内をしてくださった方は、「長年、製造一筋に技術・技能を極め、高品質の大物鋳物の安定製造は高い評価を受けている。また、精力的に技術・技能の継承のため、後進者の育成に尽力している」という技能功績が認められ、表彰された。厚生労働省「現代の名工」参照。
<https://waza.mhlw.go.jp/gendainomeikou/index.html#:text=%E3%80%8C%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AE%E5%90%8D%E5%B7%A5%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%AF,%E9%83%A8%E9%96%80%E3%81%AE%E6%8A%80%E8%83%BD%E8%80%85%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)
- 厚生労働省「第 1 部門 金属材料製造の職業等」参照。
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/11/tp1109-1a.html#dai01> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)
- 41 デイジイの情報及び写真 16 はすべて『デイジイ公式サイト』参照。
<https://www.daisy1962.co.jp/> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)
- 42 表 2・3 は当日資料を元に作成し、一部抜粋したもの。
- 43 川口宿鳩ヶ谷宿日光御成道まつり実行委員会公式サイト参照。
<https://www.onarimichi-matsuri.jp/> (2022 年 6 月 8 日閲覧及び確認)。
- 44 共同浴場とは、低料金または無料で入浴できる公設・私設の浴場のこといい、主に、地元の人々が管理する温泉を利用した浴場を意味する。所謂お風呂屋さんや銭湯と言われる公衆浴場とは異なる。
- 45 「小さな拠点事業」とは、『浜村地区まちづくり実施計画』のなかでも取り上げられており、「浜村地区グランドデザイン」をつくるうえで活用されている取り組みを指す。集落生活圏の中に郵便局やガソリンスタンド、学校や道の駅等を充実させることがイメージされている。
- 46 埼玉県警では、風俗環境等の浄化のため、2005(平成 17)年に「繁華街・歓楽街総合対策本部」を設置し、大宮駅周辺地域及び西川口駅周辺地域を重点推進地区に指定して、取り締まりをはじめとする諸対策を推進している。埼玉県議会「平成 27 年 2 月一般質問・質疑質問・答弁前文(沢田力議員)」参照。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/e1601/gikai-gaiyou-h2702-g050.html> (2022 年 6 月 15 日閲覧及び確認)